龍聲

東龍寺報
平成元年三月廿五日創刊

発行編集所 〒959-1502
新潟県南蒲原郡田上町
曹洞宗　東龍寺
電話 (0256) 57-3395
FAX (0256) 57-2174
ホームページ
http://www.ginzado.ne.jp/~ryusei/
E-mail
ryusei@ginzado.ne.jp

北アメリカへ特派布教に赴いて

東龍寺住職　渡邊宣昭

北米別院禅宗寺での法話の様子　9月15日

昨年九月十三日～二十四日までの十二日間、北アメリカでの特派布教の機会をいただきました。丁度、秋彼岸会法要の日が、重なりましたが、法要の導師を安龍寺様にお願いし檀家の皆さんのご理解を頂き無事赴くことができました。

ロサンゼルス、サンティアゴ、サンフランシスコを中心に六か所の教場を巡回し、その内、日系人の信者の方が多い寺院三カ寺、参禅に主眼をおいたアメリカ人中心の「禅センター」と呼ばれる道場が、三カ寺でした。

令和元年度は管長猊下の布教教化のお言葉に坐禅を中心とした信仰生活をと謳っておられたことから、演題は「今ここをどう生きる～1.5人称の関わり～」で、自分と相手との壁を取り去り、２人称ではなく、1.5人称の関りを持って生きていくことの大切さ素晴らしさを一仏両祖の教えを通して、訴えようと臨みました。

十五日、最初の教場は、北アメリカに於いて最初に開かれた寺院であるロサンゼルス両大本山北米別院禅宗寺で、日系人信者の多いお寺でした。

彼岸法要に合わせて、御詠歌の奉詠があり、子供さんたちが参詣者におはぎを配ったり、家族皆でお参りしている様子がとても微笑ましく、日本のお寺で失われつつある檀信徒との繋がりの深さを感じました。

法話は彼岸法要後に行われ、通訳は、国際布教師のマクマレン懐浄師がつとめてくれました。今回が初めての通訳だったそうですが、学生時代に二度の日本留学、奥様が日本人、日本の僧堂での修行経験もある方で、非常にわかりやすく、感情も込めて通訳をしてくれました。どのような反応を示されるか不安の中、手探りの状態から法話が始まりましたが、一緒にジャンケンをする場面や「はきものをそろえる」という詩を日本語、引き続き英語で一緒に唱えてもらう場面では、皆さん積極的に参加協力をしてくださいました。

これはどの教場でも共通したことですが、皆さんの反応がよく、熱心に聞いて下さるので、とても話しやすい雰囲気の中で法話をすることができました。

また、各禅センターは、現地の国際布教師が坐禅を中心に布教活動を行っていて、ゲルと呼ばれるモンゴル式住居の坐禅堂や、一般の住居を改造した坐禅堂で、坐禅をした状態での法話となりました。

禅センターの参禅者によっては、境内地に隣接するアパートに

バークレー禅センター・祥岳寺で坐禅しての法話　9月20日

住み、日中は普通に働いて、朝や夜に集って坐禅を定期的に行じていることにあわせ、法話の時間も午後六時や七時頃からとなりました。普段の生活の中に坐禅が根付いているという印象であり、道元禅師は『坐禅を中心とした生活は一生涯において最も大切なことである』と学道用心集で御示しですが、まさに、その教えを実践している様子を窺い知ることが出来ました。

法話の後には、どの教場でも茶話会を開いてくださいました。和やかな雰囲気の中で、簡単な質疑応答の時間を設けたのですが、その中で考えさせられる問いがありました。「自分が辛い時に、人に何かをしてもらうことに抵抗があるが、どうしたらいいか。」というような質問でした。私は、「そんなことはないですよ、甘えればいいんです。」と訳して答えてもらおうとしましたら、通訳の懐浄師が困った顔で「甘える」という日本語を英語で表現することは難しいと言われ、頼るとか信頼するという意味の「ｄｅｐｅｎｄ（ディペンド）」に言い換えるなど、通訳に苦慮していました。また、食事の際の「いただきます」「ご馳走様」にあたる適当な英語もないそうです。私は、「2人称ではなく、1.5人称の関わりを持って生きていくことが幸せに繋がってくるのですよ」と伝えてもらいました。

スウィートウォーター禅センター・光泉院での茶話会　9月18日

また、日本人のある国際布教師が、「こちらでは、お寺を信仰の拠り所とするより、僧侶個人を崇拝する気持ちが強く、僧侶次第で信者が増減すると思います。これからの日本の信仰の在り方の参考になるかもしれません。」と語っていました。同師は、自らお寺の名前の入ったエプロンを掛け、率先して檀信徒とともに作務をし、法要になると法衣に着替えて、檀信徒をリードしている姿がとても印象に残っています。いずれの教場においても、国際布教師が自ら率先して、檀信徒の輪の中に入り、共に仏道を歩む姿がありました。

私は、此の度の滞在に於いて、ｉＰｈｏｎｅなどを開発したＡｐｐｌｅ社の創業者であったスティーブ・ジョブズ氏を禅の世界へ導いた故乙川弘文老師とご縁のある寺院への訪問や、関係者と会いできたらと願っておりました。

弘文老師は、私が小学生の頃には大学院生で、私の伯父が住職していたお寺の後任候補者となり、知野弘文と名乗りました。本の山に埋もれて勉学に励んでおられる姿がとても印象的で、子ども心にすごいお坊さんだなあと思ったものです。そして、永平寺へ修行に行かれ、推挙されて国際布教の為、渡米されましたが、平成十四年、池で溺れた娘さんを助けようとして自らも溺れ、帰らぬ人となりました。

しかし、弘文老師については、僧侶だけでなく信者の方々も今も鮮明に覚えておられ、禅への導きを頂いたことに感謝の気持ちを示しておられました。また、弘文老師の開かれた慈光寺を訪ね、弘文老師と娘さんが一緒に埋葬されたお墓をお参りすることもできました。

慈光寺、弘文老師老師の墓参り　9月21日

日本から八千キロメートルも離れた場所で、亡くなってから十七年もの歳月が流れた今も、師の教えが息づいていることに悦びをおぼえ、禅の教えの素晴らしさを確信して参りました。

北アメリカでの体験を宝として、檀信徒の皆様と共に禅の道を歩んでいきたいと念じております。

合　掌

サンフランシスコ、桑港寺での法話を終えて集合写真　9月22日

総代に就任して

新潟市秋葉区　川瀬五夫

平成の時代が終わろうとしている昨年三月十四日、突然方丈様からの電話。相談事があるので午前中に伺いたいとの事。

なんと！総代への就任以来。突然の事に驚き不安が駆け巡る頭の中、片隅では断ろうとする言葉探し・・・

私の様な者が総代という大役が務まるはずもなく、他の役員の皆様方に迷惑をかけること必定。

専門学校での授業の様子　11月14日

しばし続いた押し問答から少し離れて、二十八年前に亡くなった私の父の昔話。思えば父が病気で世話人の役務が務まらなくなり私が代役で参加したのがおよそ三十五年前。現在の世話人の中では既に古参に入っておりました。

そして私の仕事が定年で退職するまで葬儀社に務めており、そんな関係で新潟市は元より近隣の御寺院方とも交流があり（宗派を問わず）そういう側面からも少しは東龍寺様の力になれるかも知れないと思い、引き受けることにしました。

現在は退職してから縁を得まして、専門学校で将来葬祭業を目指す学生達を指導しております。写真は教室での一コマを掲載してみました。また、授業の一つに東龍寺様で年に一度坐禅を体験し御指導をいただいております。卒業した生徒達は新潟県内は元より県外にも活躍の場を広げており、東龍寺様での経験が生徒達の目指す目標に少しでも力になれればと思っております。

さて、この様な私ですがこれより総代の一人に加えていただき、すでに就任されている渡辺様、畠山様と力を合わせ世話人方のご協力をお願いして微力ではありますが、檀信徒の皆様方のお力となれる様、精進を重ねたいと思います。どうか皆様方のご指導をよろしくお願いいたします。

最後になりますが平成から令和に元号が変わり気持ちも新たに皆々様と共に災害のない心静かな平安の日々を送れます様、御祈念申し上げます。

住職より一言

川瀬さんは、評議員をおつとめ頂いていた先代が病床に臥してから、代わって昭和の時代から寺の護持に協力してくださいました。

葬儀社におつとめでしたので、近隣の方丈様方とも顔見知りで、寺の大きな行持では、寺方と檀信徒とのパイプ役を果たして下さり頼りになる存在でした。

総代が一人欠員となり、是非にとお願いした処、熟慮の末であったようですが、快く引き受けてくださいました。いつも積極的に寺の行持や研修会に参加して下さり有難く思っております。

寺檀関係が、希薄になりつつある昨今ではありますが、寺と檀信徒とのより良い関係を築いてくださることを期待しております。

永平寺電話説法

TEL
0776－63－3399

役寮が、10日ごとに代わって、３～５分の法話を行なっています。

曹洞宗心の電話

ＴＥＬ　0120－508－740
携帯電話　03－3454－5410

こちらに電話をすると、全国の曹洞宗の方丈様達が一週間交代で、３分間の「ほとけの心」をわかりやすく説いた法話が流れます。24時間いつでも繋がりますので、是非、お聞きください。

東龍寺眼蔵会に参加することの現代への問いかけ

五泉市 永谷寺副住職　吉原東玄

「家族葬」、「墓じまい」、「寺離れ」、「直葬」…、メディアで目にしない日はないほどに定着した言葉を横目に葬式仏教は今日も淡々と、しかし厳粛に営まれている。「仏教」と「葬儀」、これまでに様々な議論が交わされてきた歴史を振り返る時、辿り着くのが「生老病死」の四苦からの解脱である。「生者必滅」の言葉に表されるように私たち生きとし生けるものは必ず死ぬ時が訪れる。死んだらどうなるのか、それは誰にもわからない。釈尊も死後については一切語っていない。これだけ科学が進歩しても死後の世界については何の研究結果もでていない。だからこそ人は未知なるものに不安を抱き、苦悩するのだろう。釈尊はそんな人々が抱く未知の苦悩を少しでも解き放とうと心静かに考えた。

中日集合写真　7月4日

「人々の持つ根本的な苦悩を少しでも解放し、安楽な生き方を提供したい」、これが釈尊の説く教えである。

「坐禅は菩薩行である」、禅寺での修行を経験した者なら、誰もが耳にする言葉である。菩薩行とは、自分のことを投げ打って他者の苦しみを解き放とうとする行いである。なぜジッと坐っているだけの行為が、他者を救うことになるのか。それは、坐禅によって自己を捨てきることで、自身の生死を決着し、自己と他者との区別さえなくなり、他者の苦しみが自己の苦しみとなり、他者を救わなくてはいられなくなるのだ。「坐禅の功徳力」と言われる所以だろう。しかし、ただ見様見真似、自己流で坐禅をしたところで、それは邪道である、と釈尊、道元禅師は説くのだ。そこで考え出されたのが「サンガ」つまり修行道場での集団生活である。それぞれが監視し合いながら自己本能の暴走を抑制して刺激の少ない生活を継続する。ひとりでは修行はできない。修行したいと願う多くの人たちが集まってはじめて修行の団体が発足する。「今生の仏法修行はこの檀越の信心によりて成就す」という瑩山禅師のお言葉にもあるように、幸いなことにこの日本においては僧侶も、一般檀信徒もともに修行できる環境にある。僧侶だけが修行し安楽を得ることは、菩薩行を根本とする日本仏教の理念に反する。過去に遡ってみると「人々の持つ根本的な苦悩を少しでも解放し、安楽な生き方を提供したい」と説いた釈尊の発願に他ならない。

また、一方で、日々の生活の中で僧俗が共に実践できる修行が宗門の教義として『修証義』に「四大綱領」の形で定められており、その実践が在家信者の重要な修行となる。東龍寺眼蔵会はまさに「サンガ」なのだ。僧俗を超えたまさに仏教における理想の修行道場である。短い期間ではあるが、皆仏道を修しようと発願し、営みを継続しようとする意思を持ち全国各地より参集されるこの会は、まさに釈尊が提唱されたサンガそのものである。起居、坐禅、食事を共にし、仏道を修める。実にシンプルな釈尊在世時の生活を実践しているではないか。このような生活の中に所謂「煩悩」は生じない。お互い同じ発願を持つ仲間たちが研鑽し合いながらの生活であり、当然のことだ。釈尊の行願である。

一昨年の中日法要で維那をつとめる筆者　平成30年7月6日

人々が持つ未知の不安を解消するのが僧侶に与えられた役目なら、ただひたすら寄り添い、共に

生きてゆくしかないのだろう。僧侶が葬儀に携わるようになったのも、ごく自然な流れである。

『死』に対する不安の解消。これが日本仏教の『葬式仏教』といわれている所以で、老病死苦に寄り添う釈尊の仏教となんら相違ない。その実践の先駆的な会がこの眼蔵会である。この眼蔵会に参加することで、菩薩行を修め、広くは世界平和の一助に寄与しているのだ。この会を継続されているご住職はもちろんのこと、毎年欠かさず参加される方々、素晴らしい会だと勧め、未だ悟ることを知らない人たちに菩薩行を広めている方々、この会を知り、発願し初めて眼蔵会を修めようとする方々、この会に有縁の方々すべての縁起で仏道は修し行われる。２，５００年前の仏教形態が、時代、国境を越えて今なおこの新潟の地で毎年継続されていることに人間として出生して仏の教えに出会えた真の悦びをおぼえる。

飯台の様子　7月4日

『葬式仏教』が仏教に対してなんら否定的でないことの確信をこの眼蔵会で毎年享受している。葬式の形態は少しずつ変化してゆくだろうが、『死』に対する苦しみが消えない以上、仏教もまた必要とされ、人々の生きる糧としてこの先も求められ続けるだろう。そのためには永続的にこの眼蔵会を修め続けることが私はもちろん、老病死苦からの解脱を求めたい方々すべての課題である。

『こころの時代』といわれて久しい昨今、この眼蔵会に参加し、自己の本性を見つめ、生死への執着を超え、清々しい仏の境地へゆかれんことを、万人に祈念申し上げ、東龍寺住職渡辺宣昭方丈さまに御礼の言葉としたい。　合掌

住職より一言

師は、小千谷市の潮音寺様のお生まれですが、縁あって、御祖父様の実家である永谷寺様へ、平成七年、中学三年生の時に後継者として入られました。

それから、二十五年が経ちますが、永谷寺副住職として檀信徒との結びつきを大切にしながら、多方面に活躍されています。

特に、加茂で月一回行われている法話会では、檀信徒との深いかかわりを感じさせる温かみのある法話をされ、聴衆に好評です。

一層のご精進と飛躍を期待しています。

先祖供養を終えて

羽生田　伊藤　昇

初めまして。

私の家の本家は、元々は中店にありました。昭和の始めに事業に失敗し倒産…、一家離散していますが、菩提寺は、本家、分家、親戚は元々東龍寺の檀家でした。

私の家だけ定福寺の檀家で、前から何故だろうと思って来ました。

私共は二人の子供が授かりましたが、次男を小学生の時、長男を大学生の時に、相次いで急病で亡くしました。それまでは私自身、神とか仏とか関心はありませんでしたが、自分への反省や、これからどうすれば子供の為になるか？考えに考えた末に、「供養しかない」と心を入れ替え、一年間は、朝は家で、夜は八時でも九時でもお寺の本堂に行き、般若心経をお勤めして来ました。

その後、三十年余、毎朝家の仏壇で、般若心経をお勤めしています。

私と妻が亡くなった後の事を考えると、親戚の菩提寺である東龍寺様にお墓を移し、親戚に供養をお願いするのが最良の選択ではないかと、定福寺様、東龍寺様に御相談しご理解を頂き、此の度、東龍寺様の檀家に加えて頂く事になりました。

去る七月十四日、お墓を東龍寺様に移し、正式檀家として、子供の三十三回忌や先祖供養をして頂き、又永代経を志納致しました。今後とも、私にできる、お勤め、供養を最大限して行きたいと思っています。

私自身も高齢者の仲間入りをしていますので何年御勤めできるかわかりませんが、よろしくお願いします。

住職より一言

伊藤昇氏は、住職の祖母（東龍寺先々代の連れ合い）の姉の孫で、昇氏が郵便配達の折、東龍寺で祖母と話しながら、昼の弁当を

食べておられた姿を思い出します。

その後、最愛の御子息二人を相次いで亡くされたことは、住職の記憶にも鮮烈に残っています。

此の度、熟慮の末、東龍寺の檀家となり、先祖を供養していきたいとの強い覚悟をお持ちになられたことに、深い敬意を表します。

法事の前にご夫婦で御袈裟の仕付け取り　7月14日

七月の法事の折、頂いた永代供養料で御袈裟を一肩つくらせて頂きました。今後とも一日一日を大切に過ごされることを願っています。

父を送って

川之下　川口比左子

自分の事は、ほとんど自分でやり、しもの世話ひとつさせず立派に旅立った父でした。初七日を終え、四十九日まで、一人で家に居てもらうのは可哀想とのことで東龍寺様に、お骨を預かっていただく事になりました。七日、七日日を東龍寺様に集まり、お経を上げていただきました。皆で集まる事で、なお、家族の絆が深まりました。集まる度に、お寺の皆様から大変良くしていただき親しく、お話をさせていただきました。

来春、方丈様が大本山永平寺授戒会に於ける一座の法要に禅寺様に代わり報恩供養の焼香師に任ぜられ、その際にお召しになられるお袈裟を一二五枚の布をつなぎ合わせて作られることをお伺いし、私達姉妹も、一枚づつ縫わせていただく事になりました。大奥様から教えていただき、普段針を持たず、つたない出来ではありましたが加えて頂きました。皆様が心を込めた、一枚、一枚がどのように仕上がるのかとても楽しみです。

袈裟把針の様子10月6日（筆者右端）

また、永平寺様にお伴し、お袈裟をお召しになり焼香師として立派に、お勤めされるお姿を拝見させていただけると思うと、今から心がときめきます。

父の導きにより東龍寺様とのご縁がより一層深まった様に感じます。ご縁をこれからも大切にさせていただきたいと思っております。

住職より一言

昨年六月に川口新一氏は、九四歳でお亡くなりになりました。三姉妹の長女・比左子さんの一人息子・誠君が、幼少期に大病を患ったことから、毎年正月にお孫さんの健康を祈って、寺から、手作りの御守りを特別に作って差し上げてきました。

これからもお寺とご先祖を拠り所として、仲のいい三姉妹並びにご親族で過ごしていってください。

丸子孝法老師の御法話を拝聴して

長岡市　河内千明

私は丸子老師が若い頃勤めておられた東レ時代の同級生、河内大典の兄の河内千明です。

いつも丸子老師の素晴らしさを弟から聞いており、いつかお話を聞きたいと思っていました。新潟に来られると云うことで滋賀の弟と親戚一同駆けつけました。私は初めてお会いした丸子導師様のお顔が良寛様のような方と思いました。

丸子老師の御法話は二十四才から十六年托鉢によりお寺を再興させたお話とそれにまつわる実践の話でした。御法話は迫力があり心の底から引きつけられ心を揺り動かされました。

特に心に残ったお話は「私が私になるために人生の失敗も無駄な

苦心も骨折りも悲しみもすべて私にとって必要な物であり、人生に無駄はない。」と言うお話でした。

托鉢で由緒ある平等寺を完成するというは先代の師匠と約束がありました。強い壮絶な決意、そこに仏の力が展開され平等寺が再興されたのだと思います。

強い決意と実行は、「禅」そのものなのでしょう。

さて、このような事とは別に、御講話は、終始にこやかで愛にあふれる物でした。用意された法話の資料に沿ってお話しされ、またそのお言葉を歌にまでされてお話し下さいました。私達が理解できるようにと資料を元に具体的にお話下さいました。その心が私達の内に宿る仏に強く働きかけてくださったのでした。

私達人間の奥底の心の本質に宿る仏。仏の子としての善性は実在する本質を感じました。

さて、振り返ると、私の父が、弟、大典のお仲間でもある、丸子様の素晴らしさに感銘され、自宅のお墓をたてる時、家からは遠い長岡の禅宗のお寺、定正院にお墓を作った意味がここにあった父の気持ちがやっとわかりました。

禅宗の深い教義を学ぶ機会を与えて下さった、東龍寺住職渡宣昭様に感謝申し上げます。ありがとうございました。

丸子老師と河内氏の親族、筆者右端10月13日

住職より一言

此の度の秋の講演会は、住職が本山に奉職しているとき、副監院をおつとめだった丸子老師がお越し下さいました。そこへ、ご友人河内氏が親族と共に聞法に駆けつけて下さり、心より感謝しております。

改めて、老師の魅力と縁の不思議さを実感し、さらに、良きご縁を積極的に結んでいくことのすばらしさを教えて頂きました。

眼蔵会（げんぞうえ）案内

第十九回眼蔵会を七月八日(水)～十日(金)に行います。是非、ご参加ご修行ください。

【東龍寺年中行持】

六月　金毘羅
八月一日　うらぼん会（盆参）
八月廿四日　水子地蔵尊並びに・観音様大祭
九月廿三日　秋のお彼岸会（お彼岸の中日）
十月十日　常斎米法要
十二月三十一日　除夜祭（除夜の鐘）大般若祈祷会
一月一日　寺年始（近隣の檀家）
一月二日　寺年始（遠方の檀家）
三月廿一日　春のお彼岸会（お彼岸の中日）

【令和元年度事業、行持報告】

一、四月十九日、山門脇の池の泥上げを行った。

一、五月十七日～六月二十一日にかけて、照光殿二階・位牌堂のムササビ防除を行ない、その後、月一回防除を行なっている。

一、六月十日～二十三日、照光殿一階エアコン三台取り換え工事を行った。

山門脇池の泥上げ　4月19日

照光殿一回エアコン取替工事　6月15日前後

一、七月三日（水）～五日（金）に、駒澤大学教授角田泰隆老師を講師にお招きし、第十八回眼蔵会を、講本「行持」の巻（四回目）で開催した。

一、七月十一日（木）午前十一時より、第三十回金毘羅大祭を講員四十名の参加で行った。

一、八月二十四日（土）、第四十一回水子地蔵・第二十回聖観世音菩薩大祭を行った。東京都全昌院住職安達良元老師に、法話をおつとめ戴いた。

一、九月二日、三月の大風で壊れた東龍寺案内看板を新装した。

一、九月七日（土）午後五時から、第十回湯田上温泉祭りの一環として、クラシックコンサートが、本堂で行われた。田上在住のソプラノ歌手・桑原純子氏、フルートの金子由香利氏、箏の奥村京子氏のトリオで和みの時間を過ごした。

一、十一月四日～二十日、墓地の杉と雑木、合わせて十本伐採。

金毘羅大祭　7月11日

第10回温泉まつりコンサート　9月7日

墓地立木伐採　11月15日

一、十月十三日（日）午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、講師に奈良県平等寺住職丸子孝法老師をお招きし、第二十四回秋の講演会を行った。

一、十二月二十七日、山形沖地震三日後の六月二十一日に大破した韋駄天様（宮殿含め）が、仏像文化財修復工房の松岡誠一氏（田上町在住）により、修復され、無事開眼安置された。

韋駄天様（宮殿含め）が落下して大破
6月21日

韋駄天様、開眼の様子
12月27日

【参禅の報告】

一、三月二十五日、ＮＨＫ文化センター「坐禅に親しむ」の会員十名、東龍寺で坐禅二炷、中食。

一、四月十九日、「第三十九回　卯辰会の集い」。十三名。

一、六月二日、加茂中学校野球部、十六名。

一、六月十一日、須佐製作所一行十二名。

一、六月十三日、田上小学校三年生親子、七十八名（内子供四十一名）。

一、六月二四日、裏千家淡交会信越学校茶道連絡協議会一行四六名。坐禅体験並びに東龍寺の歴史紹介と諸堂案内を行った。

一、七月二十四日、国際ホテルブライダル専門学校（ＮＳＧ）。四名。

一、七月二十八日、中越高校バレー部、二十七名（生徒二十五名、先生二名）。

田上小学校3年生親子坐禅　6月13日

中越高校女子バレー部　7月28日

一、九月二十六日、ＮＨＫ文化センター「坐禅に親しむ」の会員七名、東龍寺で坐禅二炷、中食。ＮＨＫ主催では、最後。

一、十月六日、「新潟県システム事務部会」一行十八名。

一、十月二十七日、燕禅道友会、十六名。

一、十月三十一日、第四宗務所第三教区護持会研修会。三五名（内寺院十一名）。

一、十一月二十六日、「新潟県商工会職員協議会　指導職員部会下越Ｂ支部」三十名。

【令和二年度事業、行持案内】

一、七月八日（水）～十日（金）に、駒澤大学教授角田泰隆老師を講師にお招きし、第十九回眼蔵会を講本「行持の巻（五回目）」で、開催する。

一、十月十一日（日）午後七時より、田上町仏教会では、東龍寺を会場に、講師に高田都耶子（華聖）先生（元薬師寺管主・故高田好胤老師のお嬢様）をお招きし、第二十五回秋の講演会を予定している。

【月例加茂法話会】

一、毎月一回、夜、加茂市中央コミュニティーセンター（三月からこちらに会場変更）を貸り、僧侶十名（三名ずつ担当）による法話を聞く会を開催しています。お気軽にご参加下さい。

【月例坐禅会の御案内】

一、月例坐禅会を毎月第二土曜日夜七時半より行っています。お気軽にご参加ください。

【心の癒し坐禅体験】

一、毎週水曜、木曜（祭日は除く）の午後四時から、約一時間、湯田上温泉宿泊者に坐禅修行体験をしていただいております。

但し、八月・十一月～三月は、お休みしています。

【梅花講のお知らせ】

一、梅花講では、毎月七日と、二十二日の二回練習をおこなっています。お始めになりたい方は、お気軽にご参加ください。

【お詫びとお願い】

一、四月二五日（土）～二七日（月）に、田上本山講では「大本山永平寺（授戒会焼香師随行）参拝と京都天橋立・小浜国宝めぐりの旅」を行う予定で、参加者を募ってまいりました。

しかしながら、年が明けてから、広がってきた新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、参拝の旅を延期することになりました。

来年の同時期に行うべく、改めてご案内いたしますので、是非とも大勢の檀信徒皆様のご参加をお待ちしております。

【お盆、棚経の日程】

一、今年は、お盆の棚経回りを下記の日程で行いますので、ご理解とご協力の程、お願いします。

【お盆前】新潟・亀田・三条・巻・燕・白根

【十三日住職】新津・中山・赤渋・笠巻・三ツ屋・三枚潟・市ノ瀬・覚路津

【お盆中住職】本田上・上野・羽生田・川船河

【光明寺様】川之下・原ヶ崎・下吉田・鎌倉・新保・龍玄・嶋・庄瀬・石田

新田・後藤・曽根・横場・加茂地区

【少林寺様、若様】湯川・谷・中店・山崎・山田・湯古屋

尚、当日多少の変更が出る場合もあるかもしれませんが、ご容赦ください。

編集後記

寺報三十二号を発刊するに当たり、吉原東玄師、川瀬五夫氏、伊藤昇氏、川口比左子氏、河内千明氏より、ご寄稿を賜り有難うございました。今後も皆様のご寄稿をお待ちしております。

昨年五月一日に元号が平成から令和に改まりました。これを機に平成元年から年一回発行してきました寺報をＢ５版からＡ４版にグレードアップいたしました。少しでも読みやすい寺報になればと願っております。

住職　合掌